

氏録編纂の昔を憶ふと共に、本書も亦時代の歴史的モニュメントとなるべきを思ふのである。(菊判四九一頁、口繪二葉、朝鮮總督府中樞院發行、賣價未詳)(柴田)

○樂浪彩篋塚 朝鮮古蹟研究會

人物を描いた竹製漆塗のバスケットが樂浪の一古墳から出土したことに就いては一部の人々の間に於ては當時早くも知られて居たことであらうが、一昨年濱田博士に據つて東方文化學院京都研究所の記念講演に際し、この一端が紹介せられてから、その人物畫が漢代畫像石に通ずるところが有るにとどまらず、其の筆致色彩等の優秀な點から、當代繪畫の實相を推さしむる有力な資料として一般に深き興味と關心とを與へ、これが詳細なる發掘報告の一日も早く發表されんことは等しく待望された所であつた。

偕てこの樂浪彩篋塚と題する發掘報告書が其の待望に對ふるものたる固より言を俟たぬ。先づ其の内容は序説第一編第二編後説に分ち、第一編に於ては上記バスケット

トの發掘された大同郡南串面南井里の古墳に就いて記して居る。これは横穴式系統に屬する木槨墳で羨道前室主室から成り、主室には木棺三個と木馬木偶等の存在が注意されるが前室の副葬品に比すると遺物の發見が稍少ない。前室の遺物は見る可きもの多く、就中このバスケット

ト所謂彩篋を第一に擧げる。これは大略長さ40cm幅30cm高さ20cmの長方形の籃胎漆器で、其の周縁及び身の立上りの部分に漆枠を作り、これに朱赤黃濃綠茶褐薄墨等の色漆を用ひて繫菱文龍文蕨華文雲文斜格子文等を施し、これに加ふるに大小九十餘の人物が描かれて居る。この内大きく描かれた人物に傍記の存するものがあり、それに據るとその人物が當時人口に膾炙した孝子傳等を題材としたものであることが知れ、猶山東武氏祠の畫像石のそれと一致したものすら存する。其の描法は顔手等の輪廓は毛の様な細線を以つてするに反し、衣服の如きは却つて大體粗略な描線を用ひて居る。色彩の點に於ても男女の顔など色を異にし衣服に於ても勿論その配合と調和に留意されて居る。歴代帝王圖などを聯想せしめる

圓味を帯びた容貌と肥つた體軀を一樣に持つて居るが男女小兒等の個性を捉ふることや彼等の動作に對する注意も亦忘れては居ない。

彩篋の外、彩文漆匣・同卷筒・同案・硯及び硯台・上方作獸帶鏡・墨書木札等興味ある遺物が存し、猶この前室の壁面の一部に黑白朱黃等を以つて描かれた壁畫のあることが注意される。これは木面の腐朽のため、遺憾ながら殆ど剝落して居るが騎馬人物の圖であつたことが想像され圖版に掲げられた模寫を通じ、當代流行の騎馬の一例として看過すべからざるものである。

第二編は大同江面石巖里發掘の二古墳に就いて記して居る。これは彩篋塚の完全なるに反し、兩墳共に盜掘の難に相遇し、その點から興味の減ずるは免れないが、前者の横穴式複室であるのに對し、堅穴式單室である點から樂浪古墳の墓制上の問題に關し學術的價値に於ては必しも遜色ありとは謂ふを得ない。更に遺物中特に注意すべきものは、二者の一なる二〇一號墳から前漢末の元始居攝等の紀年銘を有する漆器の數點出土して居ることであ

る。書式に於ては從來の出土品に於けると格別の差違は認め難いがこの墳墓の年代觀に重要な意味を持つこと論を俟たぬ。此の外、竿頭金具・車輻狀木製品・式占天地盤等が興味を惹く。後説に於ては此等諸墳の營造年代と墓制上に於ける位置とに論及して居る。其の構造は上記の如く一は堅穴式單室木槨墳なるに對し、他は横穴式複室木槨墳で且つ埴槨墳の形式に酷似して居る。其の副葬品に就いて觀るに漆器に於て前者が漢代工官の製品等日用の而も高價なる什器多きに對し、他は比較的匱製の器物が多い。その裝飾文などを比較するも兩者の間に明かな差異が認められる。猶後者では明器の存在が特に注意される。さて木槨墳と埴槨墳との營造年代であるが一に於ては前漢から後漢中期、他は後漢中期以後兩晉に及ぶとして居る。尤もこれは流行年代の上下限の決定であつて、固より中間に於ては兩者並びに行はれた。かくて又この間折衷的な木槨併用墳も行はれ、これに二種の構造があるが、彩篋塚は此の一範疇に入る。最後に此の塚の營造年代を考定し、遺物中確定的年代を示すものを含ま

ないが、鏡古泉器物の形式などから推して後漢末期に比定すべしと述べ、従つて、石巖里の二墳は更に年代を溯り、前漢末期から後漢初期にあるものと結んで居る。附録として吉川學士の樂浪出土漢匱圖像攷證なる一文がある。博引傍證至らざるなき攷證であるが、唯愆を云へば行文に句讀點を用ひる親切が欲しかった。一般の讀者に對して文章に於ける理解の容易と正確とは學術的論述に關する限り少しも其の價値を害ふものではないと思ふ。猶又濱田博士の英文の綱要が載せられ、これは簡にして要を得たものである。(圖版百三十餘。朝鮮古蹟研究會發行)

(小野)

○北佐久郡の考古學的調査

八幡 一郎著

本書は同じ著者の『南佐久郡の考古學的調査』(昭和六年刊)に繼いでその一半を形成するものである。これによつて信州千曲川最上流の一盆地、佐久平の考古學的調査は一とほり完成したわけである。これほどエキゾース

ティヴに調査された地域は全國でも稀であつて、その點甚だ重要な文獻であると云へる。かくて考古學における地域調査なるものが如何なる觀點から、従つてまた如何になさるべきかとの論議にも一つの焦點が與へられたのである。從來とても地域調査が皆無ではなかつた。鳥居龍藏博士の上伊那、梅原末治氏の鳥取縣、島田貞彦氏の滋賀縣における調査や、地方史の一部においては自然に行はれてゐたが、それらは現行行政區劃を基とするもので何ら必然性をもたない。本書が特に地理的な最小單位を取上げたのは大いに學問的な意味を異にしてゐる。いま端的その成果に就いて見るに地理的な概括を行つたところは成功してゐる、遺跡の地貌による分類統計とその平面的・垂直的な分布を問題にしてゐるところは確かにひとつの結果が獲られた。しかるに時間的推移を論ぜられる「考察」の部はやゝ冗長に失し、この地域調査からする特別な結果はほとんど出てゐない。これは地域調査の一般的な成果を暗示するものではなからうか。即ち、地域調査である故にその地域そのものとしては甚だ重要な結果